



しかしこれは日本語特有の問題ではないかもしれない。英語にも鼻音化に関する不思議がある。「三言三言」という代表的なあいづちの変わりに「三言三言」も珍しくない。同じく「yeah」というあいづちが「oyeah」

まだ観察不足。しかし、娘が大きくなり、だっこを要求しなくなり、この現象は永遠に不思議のままに残りそう。ところで、鼻音化された発語はこれだけではない。「はいん」という表現もときどき聞く。研究室の向こう側の電話が鳴いて、接音の人が「はいん」と言いながら取りにいった。まだ鳴っている電話に話しかけることも、「はい」の変わりに「はいん」と言うこともおもしろい。なぜそう言うのか、と聞きかけたが、「かも」と「あひる」問題を思い出して黙った。また、事務室で若い女性が上司の指示に「はいん」を答えた。第三者の私の耳には「もう知っている、まもなくやる、言われなくてもちやんとやっている」というニュアンスを感じた。

娘が抱っこしてはしくて、「んだっこ」と言う時がある。この表現は辞書にはない。東京生まれの東京育ちだから、どこか別の言葉、方言というわけでもないだろう。「だっこ」と言う時もあるから、使っているのだと思う。「いやだよん」とも言い、これは普通の「いやだよ」という意味が違うようである。大学院生の口から「よん」を聞いたりするから、「娘語」特有の現象ではなく、日本語共通の現象かもしれない。それぞれの意味について本人に聞いてみようかと思つたが、悲しい経験を思い出してやめた。一〇年前のこと。私は日本語は趣味で、色々な不思議なことを理解しようとしていた。日本人の友達と公園の池のそばを散歩しているとき、泳いでいる鳥を見ながら、日本語の「かも」と「あひる」の違いについて尋ねた。友達は実物を指して「これは「かも」、あれは「あひる」と教えてくれた。「あれ？ 同じ鳥のオスメスだよ！ おかしいじゃない？」と

ぶらり日本語

んだっこ
ナイジェル・ワード

になることもある。「oyeah」のほうは、相手の発語がおもしろくない、新鮮味がないうすわけてはなく、なんとなくそうなる。「三言三言」で締めることが多い。わざとそんなか終わりにできないとき、最後に「三言三言」とも言う。母からの電話をなかなか終わりにできないとき、最後に「三言三言」で締めることが多い。わざとそうならない。また「okay」が普通だが、「okay」もよく聞く。「okay」のほうは相手の言うことを軽蔑する感じがする。その点で「はいん」と似ている。日本語の「ん」と英語の「ん」化は同じ意味を持っていることになる。これもなんか不思議。

興味があつた現象を壊しちゃつた。公園で一緒に散歩はしてくれるが、あひるも「かも」も私の前で使うことはない。娘には他の変わった発音もある。「飲ませて」のつもりで「のみさせて」と言ったり、手伝つてほしいときに「させて」の代わりに「しらせて」を言つたりする。しかしこれは私が日本語の初心者ときと同じように間違えたことがあり、説明ができないにしても、可笑しいとは感じない。むしろ合理的にすら感じられる。文法的に考えるより意味的に考えると説明が付くかも。「んだっこ」は「だっこ」と何か違うらしい。お散歩で大きい道路を渡る前には「んだっこ」のほうをよく言う。一方突然犬が現れたときは、「だっこ」のほうになる。だっこしてもらえないのが当然とそうじゃないときの差なのか。家の中では両方とも使うが、その場面に

(三言三言) 東京大学工学部助教